

報告・資料

非音声刺激による聴覚投映法と Big Five の関連

松川春樹*

Relationship between Auditory Projective Technique by Auditory Stimuli without Meaningful Voice and Big Five

MATSUKAWA, Haruki

Abstract

This study explored the possibility and utility of Auditory Projective Technique (APT), as a psychological test for people who have visual difficulties and impairments. Specifically, it explored which aspects of personality can be clarified by new 14 auditory stimuli without meaningful voice. Sixty participants were asked to make stories associated with each stimulus by the same procedure as Thematic Apperception Test. Those responses were analyzed by indices of content, form and cognition, and compared with Big Five. Results show that aspects of self, other and interpersonal relation were mainly clarified by APT, and that particular indices of APT were correlated with each factor of Big Five.

Keywords : Auditory Projective Technique, story-making, Big Five

I. 問題と目的

心理臨床においては、心理アセスメントにより相談者の心理的状态を適切に見立てた上で、支援方法を組み立てることが重要視されている。この心理アセスメントにおいて、心理検査の中でもロールシャッハ法をはじめとする投映法が広く活用されている。これに対して、聴覚投映法 (Auditory Projective Technique; 以下 APT と略記) は、行動主義で知られる Skinner (1936) の verbal summator 考案に始まる、一群の心理検査である。P-F Study の考案者である Rosenzweig や、主題統覚検査 (Thematic Apperception Test; 以下 TAT と略記) の考案者である Murray も研究に携わり (Shakow & Rosenzweig, 1940; Davis & Murray, 1955)、視覚障害者を対象とする心理検査としても注目されたが、現代における活用例

はほとんど見られない。熊倉 (1989) や Rutherford (2003)、松川 (2011b) はその歴史を概観し、現代における APT の利用可能性に言及している。それらをまとめると、視覚を用いる投映法と比較して APT は検査用具や刺激および反応の扱いが困難であるが、視覚障害者や聴覚優位者のパーソナリティの特徴をより豊かに引き出すことができると考えられる。また、聴覚刺激は感情やイメージを喚起しやすく、刺激提示後には刺激の作業記憶に基づいて反応が形成されることから、APT は感情やイメージ、記憶などを含む内的な心理過程をより色濃く映し出す可能性を秘めていると考えられる。今後、APT を心理臨床におけるテスト・バッテリーに加えることでより多面的に被検者のパーソナリティを理解できるようになり、心理アセスメントやそれに基づく心理的

* 東北大学学生相談・特別支援センター (Center for Counseling and Disability Services, Tohoku University)
受稿 2015.12.4 受理 2016.2.24

支援の充実に寄与することが期待される。音響技術や聴覚に関する研究が進歩していくほど、この可能性や期待はなお高まっていくだろう。

松川(2011b)は、60名の実験参加者を対象に、葛藤的会話場面を中心とした聴覚刺激(以下、音声刺激)を提示して物語を作成させるという手続きでAPTを実施し、Big Fiveとの比較検討を行っている。その結果、特に勤勉性や情緒安定性と関連が認められ、対象関係や対人関係よりも不安や、葛藤場面での内省という対処および自己制御が特徴的に映し出されることが示唆された。この結果について松川(2011b)は、「刺激中の対人的葛藤がTATよりもP-F Studyに近い形でより明確に提示されたためであろう」と考察している。換言すると、刺激の特性によって反応の自由度が低まり、得られる情報が限定されたと考えられる。測定対象が明確である場合にはこのようなAPTが適しているが、APTの有用性や可能性をより広く検討するためには、得られる情報がより広範である方が適しているといえよう。

そこで本研究では、会話などの有意味音声を含まず、物音や環境音などを中心とする刺激(以下、非音声刺激)を作成し、その非音声刺激によるAPTがパーソナリティのどのような側面を映し出すか探索的に検討することを目的とする。非音声刺激を採用することにより反応の自由度が高まり、より広くパーソナリティを映し出すことができると考えられる。また、APTの研究が発展しなかった理由の1つに、聴覚刺激が視覚刺激以上に文化的影響を受けやすく、研究者間でデータの共有がなされにくかった点が挙げられている(松川, 2011b)のに対し、非音声刺激を用いることで共有可能性が増すと考えられる。APTの実施法については松川(2011b)と同様に物語作成法を採用する。聴覚刺激では、ロールシャッハ法のように刺激のどの部分に反応したか詳しく把握することが難しいため、被検者に刺激に基づいた表現を

求める手続きの方が適していると考えられる。従属変数についても松川(2011b)と同様にBig Fiveを採用する。Big Fiveは外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性の5因子で健常者のパーソナリティを幅広く捉えるモデルである(村上・村上, 2001)。Big Fiveとの関連から、APTが映し出しているパーソナリティを広く検討することができ、今後、松川(2011b)の音声刺激によるAPTとの比較も可能になるだろう。

II. 方法

予備実験

目的 聴覚刺激を選定する。

実験参加者 A県の国立大学の大学院生6名(男性4名, 女性2名, 平均年齢24.17歳(SD=0.41))を対象とした。

聴覚刺激 独自に録音した音と市販の効果音集の音を組み合わせ、30個の刺激を作成した。分析心理学における象徴解釈(林, 1999)やロールシャッハ法における内容分析(高橋ら, 2007)を参考に、臨床心理学的に意味のある音(火, 水, 時計, 破壊音など)や触覚に関連のある音(衣擦れなど)を多く採用し、刺激の曖昧性と物語の作成可能性のバランスに配慮した。長さは30秒に統一した。

手続き 実験者と参加者は机を挟んで90度の位置に座り、TATの手続き(坪内, 1997)を参考に、1つの音に対して1つの物語を作ってもらいたいことと、過去・現在・未来や登場人物の気持ちを含める他は自由に作って構わないことを教示した。希望すれば何度でも音を聴けることも伝え、スピーカーを通して刺激を1つずつ提示した。実施後に感想や意見を聴取した。

予備実験の結果と考察 6名中4名の参加者が「自由度が高かった」という感想を述べ、実際に多くの刺激において作られる物語に十分な幅が認められた。まず、この中でも特に自由度が高い刺激として参加者が挙げたものと、実際に多様な物語

が作成された刺激を抽出し、参加者に認知された刺激の意味内容と作成時に筆者が意図した意味内容とが大きくずれていたものを除外した。次に、刺激中の人物が男性とされるか女性とされるか、刺激の背景音が有音であるか無音であるか、明るい物語が語られやすいか暗い物語が語られやすい

かなど、刺激全体の多様性のバランスを考慮し、最終的に14個の刺激を選定した (Table1)。刺激の提示順序は、参加者にとって物語作成の課題に取り組みやすいように、概ね、情報量が多いものから情報量が少ないものへと進行するように配置した。この刺激の内容や提示順序に関しては、今

Table1 聴覚刺激の内容および音要素 (持続時間)

刺激	内容	音要素 (持続時間)
1	車や人々が行き交う中で、誰かが走ってきて立ち止まる。	①車のエンジン音や通過音 (30秒), ②車のクラクション (1秒:3回), ③雑踏の音 (30秒), ④女性の笑い声 (1秒:2回), ⑤コンクリートをゆっくり歩く足音 [ハイヒール] が遠ざかっていく (15秒), ⑥コンクリートを歩く足音 [革靴] が遠ざかっていく (11秒), ⑦コンクリートを歩く足音 [ハイヒール] が近づいてきて止まる (11秒), ⑧コンクリートを走る足音 [ハイヒール] が近づいてきて止まる (7秒)
2	木が燃える音がする静かな場所で、誰かが砂利道を歩いて遠ざかっていく。	①無音の背景音 (30秒), ②木が燃える音 (30秒), ③カラスの鳴き声 (3秒), ④砂利道を歩く足音が遠ざかっていく (20秒)
3	静かな場所で、2人の赤ちゃんが何か言葉を発しながら、何かをしている。	①無音の背景音 (30秒), ②赤ちゃんの声 (30秒), ③赤ちゃんの人数 (30秒), ④赤ちゃんの言葉の内容 (30秒), ⑤赤ちゃんのお腹の音 (1秒)
4	走行する電車の中で、女性が二度深いため息をつく。	①走行する電車内の音 (30秒), ②人々の小さなざわめき (30秒), ③電車が建物等の近くを通過する音 (1秒:3回), ④車体がドンドンと響く音 (30秒), ⑤女性のため息 (1秒:2回), ⑥女性のため息の回数や深さ (1秒:2回), ⑦近づいてくる踏み切りの音 (3秒)
5	静かな場所で、誰かが歩いて移動し、衣擦れの物音がした後、別の大きな物音がする。	①無音の背景音 (30秒), ②冷蔵庫の電気音 (8秒), ③電気スイッチ音 (1秒), ④木製の床を歩く足音 [革靴] が移動して止まる (9秒), ⑤衣擦れの音 (13秒), ⑥大きな物音 [ベッドに倒れ込む, あるいは, 大きなものを置く音] (1秒)
6	時計の秒針が響く静かな場所で、ガラスが割れる音がする。	①無音の背景音 (30秒), ②時計の秒針の音 (30秒), ③ガラスが割れる音 (2秒)
7	波の穏やかな海岸で、誰かがゆっくり歩いてきて立ち止まり、足早に遠ざかっていく。	①穏やかな波の音 (30秒), ②カモメやウミネコの鳴き声 (30秒), ③コンクリートを歩く足音 [ハイヒール] が近づいてきて止まる (8秒), ④足音が足早に遠ざかっていく (10秒)
8	音が反響する静かな屋内で、誰か2人が歩いてきて立ち止まり、ドアの鍵を開けて、ドアを開閉し、再び施錠する。	①無音の背景音 (30秒), ②音の反響 (30秒), ③廊下を歩く足音が近づいてきて止まる (10秒), ④足音の人数 (10秒), ⑤開錠する音 (3秒), ⑥ドアを開閉する音 (7秒), ⑦ドアが軋む音 (3秒), ⑧施錠する音 (3秒)
9	波の荒れた海岸で、誰かが足を引き摺りながら歩く中、生物の羽音や鳴き声が聴こえる。	①轟音 (30秒), ②荒れた波の音 (30秒), ③足を引き摺って砂利道を歩く足音が止まり、再び歩く (15秒), ④生物の羽音 [1つ目] (5秒), ⑤生物の鳴き声 [ネコ様] (4秒), ⑥生物の羽音 [2つ目] (2秒), ⑦生物の鳴き声 [クジラ様] (4秒)
10	屋内で、物がぶつかったり割れたりする音が聴こえる。	①ガラスが割れる音 (30秒), ②何かがぶつかる音 [木の質感] (30秒), ③床の上を何かが走り回る音 (30秒)
11	静かな場所で、布が擦れる音がする。	①無音の背景音 (30秒), ②衣擦れの音 (30秒), ③トントンと何かを叩く音 (1秒:2回)
12	風が吹き荒れる中で、誰かがスコップで穴を掘っている。	①強風の音 (30秒), ②スコップで土を掘る音 (30秒), ③草の根が何かが千切れる音 (1秒)
13	静かな場所で、誰かの心拍が響いている。	①無音の背景音 (30秒), ②心拍 (30秒), ③心拍の不規則な部分 (1秒:3回)
14	ヒグラシや鳥の鳴き声、沢の音が聴こえる。	①ヒグラシの鳴き声 (30秒), ②鳥の鳴き声 (30秒), ③カラスの鳴き声 (1~3秒:3回), ④沢の音 (30秒)

注1) 内容は作成時の想定であり、参加者によっては必ずしもこの通りに聴こえるとは限らない。

注2) ①~⑧は音要素、下線は微小音要素であり、このほか特殊な取り込みも評定対象とする。

注3) 本研究で用いた刺激の試聴をご希望の方は apt01577@gmail.com までご連絡ください。

後も妥当性の検証を重ねていく必要があるだろう。また、これらの刺激については、「赤ちゃんや心拍など『生の音』にびっくりした」、「喧嘩の音(第10刺激)が怖かった」、「全体的に静かで寂しい感じがした」、「夜や寂しいイメージが浮かびやすかった」という感想が聞かれ、不安・緊張や寂しさなどの否定的感情を喚起すると想定された。

本実験

実験参加者 A 県の国立・私立大学の大学生・大学院生60名(男女30名ずつ、平均年齢22.30歳(SD=1.73))を対象とした。

聴覚刺激 予備実験で選定した14刺激を用いた。

質問紙 松川(2011b)と同様に、主要5因子性格検査(村上・村上, 2001)を採用し、70項目について「はい/いいえ」の2件法で回答を求めた。

手続き APTは予備実験と同様の手続きで実施し、後で詳しく分析するため参加者の了承を得た上でICレコーダーにより実験の様子を録音した。APTの実施後、質問紙への回答を求めた。

分析方法 TATの指標とAPT独自の指標を用いて、内容・形式・認知の3側面から物語を分析した(Table2)。TATの指標は鈴木(1997)を参考にし、松川(2011b)と同様にAPTに合わせて変更や修正を加えた。また、評定マニュアルを作成して評定基準が一定になるようにした。なお、認知面の評定では試験的に各刺激を細かい要素に区切り、それを「音要素」と呼ぶことにし、その中でも物語に取り込まれる割合が10%未満のものを「微小音要素」と呼ぶことにした(Table1)。「触覚情報の性質」では、衣擦れなど触覚に関連する情

報に言及があった際にその性質について評定した。評定後には、以下の方法で評定値を算出した(Table3)。まず、「初発反応時間」や「刺激の追加提示回数」、「音要素の取り込み」はそのまま物語14個分の評定を合計した値を分析対象とした。次に、「自己の内界に向ける関心」や「他者に向ける関心」など「ある/ない」「該当する/該当しない」の2件法で評定する指標は、「1/0」に数値化し、残った「自己に向ける感情」や「他者に向ける感情」など「肯定的/どちらでもない/否定的」の3件法で評定する指標は、「1/0/-1」に数値化し、それぞれ物語14個分の合計を分析対象とした。

Ⅲ. 結果

APTについては、評定マニュアルに従って、全体の20%にあたる参加者12名分(物語168個分)について筆者を含む臨床心理士3名で独立して評定を行った。Cohenの κ 係数により一致率を算出したところ $\kappa = .82$ および $\kappa = .80$ であり、十分な信頼性が確認された。評定が一致しなかった部分については合議により最終的な評定を決定し、残りの評定は筆者が1人で行った¹。評定後、指標ごとに14刺激全体の評定値を算出した。評定値の平均と標準偏差をTable4に示す。Big Fiveについては村上・村上(2001)に従い因子ごとにT得点を算出した(Table5)。APTの評定値とBig FiveのT得点についてSpearmanの順位相関係数を算出し、無相関検定により関連性を検討した結果、以下の有意な相関が認められた(Table6)。内容面の指標では、「自己の内界に向ける関心」と外向性の間に弱い負の相関が得られ($\rho = -.30$,

Table2 本研究で用いたAPT指標

内容面	自己の内界に向ける関心, 自己に向ける感情, 他者に向ける関心, 他者に向ける感情, 父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情, 刺激外の人物の導入, 導入人物を主人公とする物語, 導入人物の性質, 動物の導入, 背景音に対する情緒的意味づけ, 結末の性質, 攻撃的内容, 主観的印象
形式面	初発反応時間, 刺激の追加提示回数, 語りの様式(移入形式/会話形式/物語形式), 複数の物語
認知面	微小音要素の取り込み, 音要素の取り込み, 触覚情報の性質

注) 斜字体は APT 独自の指標

Table3 本研究におけるAPTの評定値の算出方法

評定法	評定値の算出方法	該当する指標	範囲
時間や回数、個数をそのまま測定	物語14個(参加者1人分)に対する評定をそのまま合計	初発反応時間、刺激の追加提示回数 音要素の取り込み	0 ~ ∞ 0 ~ 68以上
「ある／ない」「該当する／該当しない」の2件法	「ある／ない」「該当する／該当しない」⇒「1 / 0」の変換後、物語14個分を合計	自己の内界に向ける関心、他者に向ける関心、刺激外の人物の導入、導入人物を主人公とする物語、動物の導入、攻撃的内容、主観的印象、語りの様式、複数の物語、微小音要素の取り込み	0 ~ 14
「肯定的／どちらでもない／否定的」の3件法	「肯定的／どちらでもない／否定的」⇒「1 / 0 / -1」の変換後、物語14個分を合計	自己に向ける感情、他者に向ける感情、父親(的人物)に向ける感情、母親(的人物)に向ける感情、導入人物の性質、背景音に対する情緒的意味づけ、結末の性質、触覚情報の性質	- 14 ~ 14

Table4 APT指標の平均値 (SD)

APT 指標	平均値	(SD)
<内容面>		
自己の内界に向ける関心	7.03	(2.92)
自己に向ける感情	- 0.20	(1.62)
他者に向ける関心	6.83	(2.81)
他者に向ける感情	1.10	(2.40)
父親(的人物)に向ける感情	- 0.08	(1.04)
母親(的人物)に向ける感情	0.42	(1.24)
刺激外の人物の導入	8.10	(2.63)
導入人物を主人公とする物語	3.77	(1.84)
導入人物の性質	0.79	(2.11)
動物の導入	0.40	(0.56)
背景音に対する情緒的意味づけ	- 0.81	(1.45)
結末の性質	1.08	(3.49)
攻撃的内容	2.28	(1.39)
主観的印象	1.30	(1.93)
<形式面>		
初発反応時間(秒)	135.43	(143.09)
刺激の追加提示回数	1.55	(1.70)
語りの様式(移入形式)	9.40	(3.01)
語りの様式(会話形式)	0.32	(0.72)
語りの様式(物語形式)	0.70	(2.31)
複数の物語	0.80	(1.33)
<認知面>		
微小音要素の取り込み	1.24	(1.28)
音要素の取り込み	32.30	(3.85)
触覚情報の性質	- 0.83	(1.08)

$\rho < .05$), 「自己に向ける感情」は勤勉性と知性との間に弱い正の相関が得られた(順に $\rho = .26, p < .05$; $\rho = .31, p < .05$)。「他者に向ける感情」と協調性の間には比較的強い正の相関が、勤勉性と

Table5 Big Fiveの平均値 (SD)

	平均値	(SD)
外向性	48.17	(8.19)
協調性	53.73	(9.25)
勤勉性	49.45	(8.60)
情緒安定性	48.98	(8.91)
知性	47.88	(8.97)

の間には弱い正の相関が見られた(順に $\rho = .41, p < .01$; $\rho = .26, p < .05$)。「父親(的人物)に向ける感情」と「母親(的人物)に向ける感情」においては協調性との間にそれぞれ弱い正の相関が認められた(順に $\rho = .26, p < .05$; $\rho = .36, p < .01$)。「導入人物を主人公とする物語」と情緒安定性の間には弱い正の相関が($\rho = .26, p < .05$), 「導入人物の性質」と協調性の間には比較的強い正の相関が得られた($\rho = .41, p < .01$)。「動物の導入」と協調性の間には弱い負の相関が得られた($\rho = -.33, p < .01$)。「結末の性質」では協調性と勤勉性との間にそれぞれ弱い正の相関が得られ(順に $\rho = .31, p < .05$; $\rho = .36, p < .01$), 「攻撃的内容」と協調性との間には弱い負の相関が得られた($\rho = -.28, p < .05$)。形式面の指標では「初発反応時間」と勤勉性との間に弱い正の相関が($\rho = .26, p < .05$), 認知面の指標では「音要素の取り込み」と外向性との間に弱い正の相関が得られた($\rho = .28, p < .05$)。

Table6 APT指標とBig Fiveの順位相関係数

APT 指標	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
自己の内界に向ける関心	-.30*	-.02	-.13	.17	-.12
自己に向ける感情	-.20	.10	.26*	.05	.31*
他者に向ける関心	.04	.01	-.09	.12	.00
他者に向ける感情	-.20	.41**	.23	.05	.07
父親(的人物)に向ける感情	-.18	.26*	.19	.09	.01
母親(的人物)に向ける感情	-.04	.36**	.17	.11	.06
刺激外の人物の導入	.18	.06	-.08	.12	.04
導入人物を主人公とする物語	.17	.01	-.09	.26*	.21
導入人物の性質	-.15	.41**	.23	-.05	-.12
動物の導入	-.17	-.33**	.11	.11	.21
背景音に対する情緒的意味づけ	-.11	.15	.03	.06	.10
結末の性質	-.15	.31*	.36**	.11	.00
攻撃的内容	.21	-.28*	-.01	-.03	.08
主観的印象	.04	-.03	-.16	-.17	.03
初発反応時間(秒)	-.19	-.05	.26*	-.18	.06
刺激の追加提示回数	-.02	-.14	-.11	-.11	-.10
語りの様式(移入形式)	.12	.05	-.05	.21	.16
語りの様式(会話形式)	-.19	.19	.19	.21	.11
語りの様式(物語形式)	-.20	-.07	.06	-.03	.19
複数の物語	.14	-.16	-.16	-.05	-.07
微小音要素の取り込み	.07	-.20	-.07	.06	.07
音要素の取り込み	.28*	-.19	-.05	-.03	-.16
触覚情報の性質	-.05	.20	-.10	.11	-.02

* $p < .05$, ** $p < .01$

IV. 考察

各指標とBig Fiveの関連について

以下では有意な相関が得られた指標について考察していく。なお、途中で示す相関係数はSpearmanの順位相関係数である。

自己の内界に向ける関心 結果は本指標の値が高い人ほどBig Fiveでは内向的であることを示していた。本指標は、参加者が同一化した人物、主に主人公の内界や思考過程に多く言及したときに値が高くなる。いわゆるユング的な内向性を想定しており(鈴木, 1997)、値が高いほど内向性が強いと考えられる。他方、Big Fiveの外向性は社会的外向性を反映しており(村上・村上, 2001)、本指標との間に負の相関が見られたことは了解可能である。

自己に向ける感情 本指標は参加者が同一化した人物、主に主人公の自信や有能感が多く表現されると値が高くなり、逆に、自信のなさや無力感が多く描写されると値が低くなる。本指標には参加者自身の自信や自己評価の程度が反映される考えられ、さらに鈴木(1997)はTATにおける本指標と対他者定位の組み合わせにより、自己に対し肯定的で対他者優位である場合は誇大自己などを、対他者対等位である場合は有能感や自信を、自己に対し否定的で対他者劣位である場合は自己不全感などを関連づけている。一方、Big Fiveの中で自信と直接関連するのは情緒安定性であるが(村上・村上, 2001)、本研究では知性や勤勉性との間に正の相関が得られた。知性と勤勉性は共に能力(competence)と関連するとされ(村上・村上,

2001), 相対的に関連が強かった知性は, 「ほかの人より洗練された考え方をする方です」などの項目内容から鈴木(1997)のいう對他者優位の有能感との関連を推測することができる。このため本指標は自信や有能感の中でもより對他者優位のものを反映していると考えられるが, このことを明確にするためには, 今後, 對他者定位の評定を行う必要がある。

他者に向ける感情 物語における他者, つまり, 自己以外の人物に対する感情が肯定的である人ほど協調性が高いという結果が得られた。本指標には, 一方の極として他者に与える側としての敬愛, 配慮などや他者からもらう側としての愛情, 援助などへの欲求が, 他方の極として他者を支配したり支配されたりすることや危害を加えたり被ったりすることが想定される(鈴木, 1997)。これらはBig Fiveの協調性と概念的に一致する部分が大きく, 本結果は了解可能といえよう。

父親(的人物)に向ける感情, 母親(的人物)に向ける感情 物語作成にあたって両親やそれに近い人物を連想し, 物語の登場人物に安心感や具体的な支援を提供するような肯定的人物として語る人ほど, Big Fiveの協調性が高いという結果が得られた。本研究における聴覚刺激は, 不安や寂しさなどの否定的感情を喚起しやすいと想定される(松川, 2011a), その刺激状況において肯定的人物として両親を導入することが多い人は良い親イメージを持っていると考えられる。良い親イメージは安定したアタッチメントと関連し, 安定したアタッチメントは対人関係における適応と関連する(数井・遠藤, 2005)ことから, 協調性との間にも関連が見られたのだろう。ただし, なぜ友人など他の人物ではなく, 両親を想起したのかという点については今後検討の余地が残されている。

導入人物を主人公とする物語 刺激中に登場しないが実験参加者が想像して物語に登場させた人物を中心に物語を展開する人ほど, 情緒安定性が

高いという結果が得られた。このような反応は視覚刺激による投映法よりもAPTにおいて出現しやすいと考えられる(熊倉, 1989)。刺激中の人物に同一化せず, ときには偶然その場において音を聴いている人物の立場を取ることから, 本指標には否定的感情を喚起しやすい刺激に対して心理的に距離をとっていることが反映されると考えられる。他方, 情緒安定性が高い人はその場の感情に巻き込まれず落ち着いていることができる(村上・村上, 2001)。本指標と情緒安定性は刺激に対する心理的距離の取り方という点で一致する部分があると考えられる。

導入人物の性質 刺激中には登場しない肯定的人物を想像して物語に登場させる人ほど協調性が高いという結果が得られた。本指標は「他者に向ける感情」に比べて評定対象を導入人物に限定しているため, 参加者の他者や対人関係に関するイメージの性質をより色濃く反映すると考えられる。「他者に向ける感情」と同様の視点から, 協調性との関連は了解できるだろう。

動物の導入 刺激には登場しない動物を想像して物語に登場させる人ほど協調性が低かった。複数の人物が登場しない刺激においては特に, TATと同様に, 物語作成の課題は暗に人物の導入を要求していると考えられる(鈴木, 1997)。これに対して動物の導入は, 人物を導入する反応と導入しない反応の間に位置すると想定できよう。人物を導入しない反応ほどではないが, そこには人や対人関係の回避が含まれるため, 協調性との間に負の相関が得られたと考えられる。

結末の性質 肯定的な結末を語る人ほど勤勉性が高いという結果が得られた。本指標には, 複数の結末の可能性から1つに絞り込んで具体化する思い切りのよさを背景に, 楽観 - 悲観主義や長期的展望などが反映される。他方, 勤勉性の高い人には計画性や達成意欲があり(村上・村上, 2001), 物語の結末を曖昧なまま終えることなく,

登場人物が何かを成し遂げた形で終わることが多かったと考えられる。この視点から、本指標と勤勉性の関連は了解可能であろう。また、肯定的な結末を語る人ほど協調性が高いという結果も得られた。本指標は「他者に向ける感情」や「導入人物の性質」との間に比較的強い正の相関が認められた(順に $\rho = .61$; $\rho = .64$)。例えば「誰かに助けられる」「誰かと幸せに暮らす」など、対人関係が肯定的であれば結末も肯定的になりやすいことから、協調性との関連も了解できるだろう。

攻撃的内容 本指標は物語の中で何らかの破壊や爆発、人物の暴力や強い怒りの表出などが語られた場合に値が高くなる。結果は攻撃的内容を多く語る人ほど協調性が低いことを示していた。協調性の低さは攻撃性や敵対心と関連するため(村上・村上, 2001)、本指標とは概念的に一致する部分があり、本結果も了解可能である。なお、攻撃的内容の分類や質的な検討は今後の課題の1つである。

初発反応時間 聴覚刺激には時間軸があり、参加者は刺激の提示中から物語を考えることができ、思い切りのよい人であれば刺激の提示直後に物語を語り始めることもある。逆に、刺激の継時的変化によってそれまでに想起していた物語を破棄・修正せざるを得なくなり、初発反応時間が長くなることもある。結果を見ると、初発反応時間が長い人ほど勤勉性が高かった。勤勉性の高い人は計画性や達成意欲が高く(村上・村上, 2001)、衝動的に反応せずに物語を練り上げてから語り始めると考えられる。刺激の提示中に物語の変更を余儀なくされた場合にはさらに物語作成に時間をかける可能性があり、本結果は了解可能といえよう。

音要素の取り込み 本指標は音要素(Table1)を多く取り込むほど値が高くなる。物語作成というAPTの課題に対し、参加者が刺激を多く取り込みそれに基づいて対処するか、刺激をあまり取

り込まず連想に基づいて対処するかという、いわゆるユング的な向性が反映されると考えられる。結果を見ると、音要素を多く取り込む人ほど外向的であった。Big Fiveにおける外向性が高い人は積極的に社会的場面に出て行き、社会的な流行や変化を取り入れていく傾向がある(村上・村上, 2001)。外的刺激を取り込む程度および向性の視点から、本指標との正の相関は了解できよう。

14 刺激全体について

APTの側から結果全体を見ると、内容面の指標においては、人物に関する9指標のうち7個で有意な相関が得られた。本研究で採用した聴覚刺激で複数の人物が明示されているのは第1, 4, 8刺激のみであり、その他の刺激において物語作成の課題は刺激外の人物の導入を暗に要求していたと考えられる。本結果は、その要求に対して参加者の多くが対応することができ、その対応の仕方にパーソナリティの特徴が表れたことを示唆している。これは導入に関する4指標のうち3個で有意な相関が認められたこととも重なる。TATにおいて刺激中の見えないところに人物を想像するよりも、APTにおいて刺激中の聴こえないところに人物を想像する方が相対的に容易である。この点がAPTの刺激の曖昧性や反応の自由度、ひいてはAPTの独自性に関わるポイントの1つと考えられる。APTと人物等の導入とパーソナリティの関連については今後さらに検討を重ねていく必要がある。また、形式面と認知面の指標における有意な相関はそれぞれ1つのみであり、APT独自の背景音に関する指標においても有意な相関は認められなかった。本研究では、物語の語り方や場面状況の認知、風景描写よりも、人物や対人関係の描写における差の方がパーソナリティを反映していたようである。形式面と認知面の指標が参加者の何を映し出しているのかという点については、今後も検討を重ねていきたい。

Big Fiveの側から結果全体を見ると、協調性と

の相関がもっとも多く、APT の内容面の中でも特に他者に関連する指標との相関が多かった。協調性は他者に対して「温かい - 冷たい」の程度を示す因子であるため(村上・村上, 2001), 当然の結果といえよう。次いで勤勉性は3指標と相関し、Big Five の中で唯一形式面の指標との相関が得られた。勤勉性の高い人が物語を心の中で練ってまとめてから語った結果と考えられる。外向性は2指標と相関し、内容面の中でも自己に関連する指標と、Big Five の中で唯一認知面の指標との相関が得られ、いずれも向性の視点から了解可能であった。情緒安定性と知性ではそれぞれ1つのみ相関が得られ、情緒安定性は APT に特徴的に現れると考えられる指標との間に相関が見られた。全体として、Big Five の各因子がそれぞれ特徴的な形で APT に反映されていたと考えられる。

以上から、本研究の APT は参加者のパーソナリティの中でも自己や他者および対人関係の側面を中心に映し出し、また、Big Five の各因子を特徴的に映し出す可能性が示唆された。松川(2011b)は音声刺激による APT と Big Five の比較から、音声刺激が提示する葛藤的な対人状況における不安や、主に内省による対処が特徴的に映し出されたと考察している。つまり、非音声刺激による APT と音声刺激による APT はパーソナリティの異なる側面を映し出していると考えられよう。ただし、音声刺激による APT に比べて非音声刺激による APT は反応の自由度が高いのか、より広くパーソナリティを映し出すことができるのかという点に関しては、今後さらに検討を行い明確化する必要がある。

今後の課題と展望

今後は本研究で得られたデータをより詳細に分析した上で、松川(2011b)の音声刺激による APT との比較を行い、聴覚刺激や反応の特徴、映し出されるパーソナリティの側面について検討を進め

たい。熊倉(1989)が APT と絵画連想法の比較を行っているように、本研究の APT と TAT の比較も行う必要があるだろう。それによって APT における人物等の導入に対する解釈や、APT とパーソナリティの非意識的側面との関連、および APT に想定される感情やイメージ、記憶などを含む内的な心理過程の反映の程度を吟味し、APT の独自性を明確にすることができるだろう。聴覚優位者に対して APT と TAT を実施して、反応にどのような差が現れるか検討する必要もあるだろう。また、病理に関わる他のパーソナリティとの関連から、APT の臨床的な利用可能性についても検討したい。本研究では実験参加者が大学生・大学院生60名に限られているため、今後、参加者の人数を増やし他集団に実施するなどして、本研究の知見もより確かなものにしていく必要がある。

このような研究を蓄積して APT の有用性や可能性を明らかにした後は、実際の心理臨床において相談者を対象に、あるいは視覚障害者を対象に APT を実施することにより、臨床的な利用可能性の検討をさらに推し進めることが考えられる。本研究の APT が心理アセスメントおよび心理的支援を実践する際の一助となることを期待したい。

謝辞

本研究を進めるにあたりご指導を賜りました東北大学の安保英勇先生、研究協力をいただきました臨床心理士の内田美子さんと三船奈緒子さんに厚くお礼申し上げます。最後に本研究にご協力いただいた皆様に心から感謝致します。

引用文献

Davis, A. & Murray, H. A. (1955). Preliminary appraisal of an auditory projective technique for

- studying personality and cognition. *American Journal of Orthopsychiatry*, **26**, 543-554.
- 林道義 (1999) . 元型論 増補改訂版 紀伊國屋書店
- 数井みゆき・遠藤利彦編著 (2005) . アタッチメント
——生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- 熊倉敬子 (1989) . 音の投影法の研究 慶応義塾大学
大学院社会科学研究所紀要, **30**, 21-28.
- 松川春樹 (2011a) . 聴覚投映法の刺激の特徴について 臨床心理相談室紀要, **9**, 33-54.
- 松川春樹 (2011b) . 聴覚投映法における諸指標とパーソナリティの関連——有意味音声の聴覚刺激を用いて 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **59**, 123-146.
- 村上宣寛・村上千恵子 (2001) . 主要5因子性格検査
ハンドブック——性格測定的基础から主要5因子
の世界へ 学芸図書
- 中澤潤・大野木裕明・南博文 (1997) . 心理学マニュアル 観察法 北大路書房
- Rutherford,A. (2003) . B.F.Skinner and the Auditory
Inkblot: The Rise and Fall of the Verbal
Summator as a Projective Technique. *History of
Psychology*, **6**, 362-378.
- Shakow,D. & Rosenzweig,S. (1940) . The use of the
tautophone (“verbal summator”) as an auditory
apperceptive test for the study of personality.
Character and Personality, **8**, 216-226.
- Skinner,B.F. (1936) . The verbal summator and a
method for the study of latent speech. *Journal of
Psychology*, **2**, 71-107.
- 鈴木陸夫 (1997) . TAT の世界——物語分析の実際
誠信書房
- 高橋雅春・高橋依子・西尾博行 (2007) . ロールシャッ
ハ・テスト解釈法 金剛出版
- 坪内順子 (1996) . TAT アナリシス——生きた人格
診断 垣内出版

脚注

註1) 中澤ら (1997) は観察法における評定に関して、「行動の一部 (全観察のおよそ20%程度が一般的) をランダムに選び、複数の観察者で観察し、その結果の一致の程度を検討する」ことによって、観察の信頼性を保障することができるとしている。本研究における評定は観察法によるものではないが、記録データに関して特定の指標やマニュアルに従って評定を行う点で共通しているため、同様の基準が当てはまると考えた。